

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530892

研究課題名（和文）

感情労働としての保育に関する研究—保育者としての成長と保育の質向上の観点から—

研究課題名（英文） A study on child care as emotional labor –To improving the quality of child care and growth of childcare person–

研究代表者

太田 光洋（OHTA MITSUHIRO）

和洋女子大学・人間・社会学系・教授

研究者番号：60248664

研究成果の概要（和文）：

保育者および保育学生を対象に、感情ワークについて、アンケートおよびインタビュー調査を行った。それらの結果から、保育者の多くは同僚に対して保育及び保育と直接関係のないところでなんらかの感情ワークを行っており、それが保育遂行上の負担になっていることが明らかになった。これらの問題を解決するには、管理職の役割が重要であるほか、保育の方針や具体的内容が共有されることが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

In order to examine the emotional work that childcare person is doing, we interview and questionnaires. As a result, it is revealed that many childcare person is doing some emotional work to coworkers. It is to solve these problems, the role of management is important, that the specific contents and childcare policy is shared is important, it was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2011年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2012年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学・幼児教育・保育

キーワード：感情労働・感情ワーク・保育者の成長・保育実習生・新任保育者・保育の質

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題

保育者養成および子育て支援において、保護者とのかわりに困難を感じるという保育者の悩みを聞くことが多く、子育て支援に取り組む保育者に、フィグリーが指摘する感情労働にともなう「共感疲労」が認められるように思われるケースにもしばしば出会った。また、保育者対象の様々な研修が実施さ

れているが、職場に持ち帰ってもなかなか共有されず、保育の質的向上につながらない。他方で、私立幼稚園の新任の保育者の約1割が1年以内といったきわめて短期間で退職するケースが増えており、その多くが園内の人間関係を理由としていることも問題として感じていた。

これらに共通する背景として、保育が「感情労働」としての意味合いを強く持つように

なっていること、保育の場では保育に関することの善し悪しではなく保育者間の感情的関係に左右されることが少なくないこと、それら感情の問題が個人的な問題として扱われていること、研修や大学等で保育について学んだこととは別のことが保育の現場では求められており、それが「感情ワーク」や保育者自身の必要感にかかわっているのではないかと考えるに至った。

(2) 先行研究

「感情労働」は1970年代末にイギリスの社会学者ホックシールドが客室乗務員の訓練過程を分析する際にはじめて用いた概念であるが、その後、1990年代にイギリスの看護学研究においてパム・スミスによって看護師の養成・成長過程で用いられ、部分的に国内の看護研究に導入されている(文献1・2)。しかし、保育における感情の問題については、バーンアウト研究など感情を個人の心の問題へと収斂させる方向性を持つ研究に散見されるものの、社会的観点や組織的観点から感情労働としての保育について検討した研究は国内外には筆者の知る限りほとんどなかった(文献3・4)。

文献1

Hochschild, A. R. 1983 *The managed heart*. Berkeley: University of California Press. (石川准・室伏亜希訳『管理される心』世界思想社2000)

文献2

Smith, P. 1992 *The emotional labour of nursing*. (武井麻子・前田泰樹監訳『感情労働としての看護』ゆみる出版2000)

文献3

Cherniss, C&Kranz, D. L. 1983 The ideological community as an antidote to burnout in human services. In B. Farber (ed.), *Stress and burnout in the human service professions*. New York: Pergamon Press. 198-212.

文献4

Zaps, D., Seifert, C., Schmutte, B., Mertini, H., & Holz, M. 2001 Emotion work and job stressors and their effect on burnout *Psychology and Health*, 16, 527-545

(3) 本研究までの経緯

そこで本研究者は、保育を感情労働の側面から検討するための近接領域の先行研究にあたりながら、学生や保育者を対象としたインタビューに着手し、その質的研究成果の一部を公表してきた。感情労働について検討するうち、これらが保育者に広く共通する問題であり、保育研究者だけでなく、実践者にとっても深刻な問題となっていることを確信した。

そのため本研究では、これまでの研究で得

られた知見をもとに量的調査を実施して全体の傾向や問題を明らかにするとともに、より継続的で系統性を持った質的な研究によって、保育の具体的場面でどのような感情操作が行われ、感情労働としての保育について、他の保育の専門性とともそれぞれの保育者がどのように理解し、その方法を獲得していくのかを明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、近年の保育の難しさを克服し、やりがいを感じながら主体的に学び成長する保育者を育てる道を探る新たな切り口として、保育・幼児教育をホックシールドのいう「感情労働(emotional labor)としてとらえ、保育の場で展開される「感情ワーク(emotional work)」という観点から保育にアプローチしようとするものである。

保育者の感情ワークに着目し、幼稚園・保育所および保育者に新たな役割が求められている地域子育て支援センターの保育者、管理職、保育学生(実習生)を対象として質問紙調査とインタビューを行う。また、新任保育者による日誌の分析とインタビューを通してその学びの過程を学び手自身の立場から捉える。これらを通して、以下の4点を明らかにすることが本研究の目的である。①保育者が保育を行ううえでどのような感情的課題を意識し、感情ワークを行っているかを量的に明らかにすること、②管理職は保育者の感情ワークをどのように受け止めているかを明らかにすること、③保育者としての学びの過程で、感情ワークを含めた保育(子ども・保護者・同僚との関わりを含む)について新任者はどのように学び、習得し、保育者として成長していくのか、そのプロセスと内実を具体的に明らかにすること、④以上の結果から、保育の場において行われている感情ワークの特性と保育の質や保育者の成長に及ぼす影響について精査し、保育者を支え、成長させる観点から保育の専門性の習得と感情労働の関連を明らかにすること。

3. 研究の方法

初年度(22年度)は、①保育者及び管理職を対象とした保育における感情ワークについての質問紙予備調査の実施と検討、質問紙の見直し、②保育初任者に対する日誌記録の依頼、得られた日誌資料の整理、インタビュー調査を行った。あわせて最終年度まで関連する研究・資料の収集と検討を行った。

23年度は、①保育者及び管理職を対象とした保育における感情ワークについての質問紙調査の実施と検討、②保育学生に対する実習における感情ワークに関する質問紙調査及びインタビューの実施と結果の整理・検討、③前年度からの保育初任者に対する日誌記

録（継続して記録を依頼）の整理と考察、インタビュー調査を行った。

最終年度（24年度）は、前年度までに得られた資料・データを整理し、総合的に考察し、成果をまとめた。

4. 研究成果

保育者の感情ワークについて、主として新任の保育者を対象に継続的なインタビュー調査を行い、新任保育者がどのような感情ワークを行っているかを時系列で検討するデータを収集した。また、実習時の学生の姿と併せて検討するために学生についてもデータを集めた。

（1）保育学生の感情ワーク

新任保育者の感情ワークの態様を詳細に検討することが可能になった。学生時から特に実習指導担当保育者や実習責任者（園長・主任等）に対する感情ワークの萌芽が認められ、それが、保育や子どもについての学びを阻んでいると考えられる。保育実習生は指導保育者の目を非常に気にしており、必要以上に緊張感が高くなっている実態が明らかになった。

これらの感情ワークが実習での最大の留意事項としてあげた学生は53%にのぼり、実習の主たる目的である子ども理解や保育者の仕事内容理解とは異なることに消耗していることが明らかになった。

実習生においては、実習での課題を明確に位置づけ、それを指導する保育者らが意識して指導している場合、学生の感情ワークが軽減されていると推測された。そのため、実習指導の段階ではその学習内容を明示し実習内容の明確化・具体化を図り、養成校と指導する保育現場がそれを共有することで改善が図られると考えられる。感情ワークについての問題を排除し、実習内容を本来の目的に合致したものしていくためには、学生が保育者の意図をその都度読み取らなければならないような曖昧さを排除することが必要であるためとそれらについての養成校と実習園での共通理解が必須と考えられる。

（2）新任保育者の感情ワーク

新任保育者は、周囲の人間関係を築く過程で感情ワークが行われ、対象の保育に対する考えや実践の意図を探ろうとしていることが明らかとなった。同僚の意図を理解し、保育において尊敬できる部分があり、自分と考えが合う人などに対しては肯定的な感情ワークが行われるようになり、積極的に学び取ろうとするのに対し、否定的な感情ワークが行われる対象との関係は消極的で形式的になっていくというように感情ワークの対象と内容に変化が認められる。継続的なインタ

ビュー調査の結果から、このプロセスにおける肯定感や否定感は相談や打ち合わせの頻度、新任者の意見の受容度や取り扱い、目標や方針の明示性などに関連していると考えられる。

また、自分の勤務する園の保育内容や方法、クラス運営上の留意点などが明示され、理解されやすい環境にある場合、感情ワークによる負担は小さい。つまり、目標に沿って具体的に内容や方法が共有されるほど、必要のない感情ワークが入り込む余地が減衰する。

また、こうした点から、打ち合わせ時間家機会が保障されているか、全体のクラス数、クラス担任であるか、フリーであるか、複数担任かといった保育者が置かれている状況、正規職員、臨時職員、パートタイマーといった勤務形態や労働条件も関与していると考えられる。

（3）保育者の感情ワーク

保育者は、同僚に対して保育についてだけでなく、保育と直接関係のないところでなんらかの感情ワークを行っている（64%）。また、それが職業遂行上の負担になっていると回答した保育者は44%であった。

特に、感情ワークが行われるのは、先輩や後輩といった保育者間の関係や管理職との関係においてである。特に、保育に関する仕事については、教材等の準備や印刷物等の準備、子どもや保護者に対する具体的なかわりについてである。また、保育に直接関わらない部分では、休憩時のお茶等の準備などである。しかし、さらに問題を複雑にしているのは、一緒に仕事をする、仕事量を案分することなく若い保育者に壁面装飾をすべてつくらせる、手紙の印刷や配布準備、掃除などをすべて行わせるといった仕事量の偏りも問題として捉えられた。

また、同僚の目を気にして時間になっても帰れないといった勤務拘束時間などとの関連を指摘する保育者も約30%いる。保育初任者の日誌記録やインタビューから、これらに問題を感じないケース、改善されたケースでは園内研修や管理職による同僚関係への言及、時間管理等によって改善が図られ、負担感が低減したという声が多い。

しかし一方で、管理職による感情ワークへの言及は、当該管理職が子どもや保育、職場への日常的関与をどの程度行っているかに影響を受けている可能性がある。つまり、管理職が子どもや保育、職場への理解や関与が高ければ改善が図られやすいが、さもなければ改善がうまくいきにくいといえる。また、感情を意識し、対象化することによって保育全体の改善が図られると考えられるが、その視点やポイントをどこに置くかは管理職によって異なるが、それが保育の質に関連して

いる可能性があることも示唆された。

(4) 支援センター職員の感情ワーク

地域子育て支援センターで働く保育者の立場は一般の保育者とは異なっていた。地域子育て支援センターの多くは保育所に併設されており、全体に占める職員の割合は10%未満であることがほとんどである。また、保育の対象は地域の親子で、保育所の在籍児ではない。しかし、園庭をはじめ使用する施設・設備は重なる部分も多い。

そのため、保育所の保育士からすると、保育所の保育に支障を来すものと捉えられることも少なくない。そのため、同僚の保育所保育士に対する感情ワークを行っていると感じる支援センター職員が、保育士に比べると多いことが明らかになった(75%)。

しかし、開設から時間が経ち、安定した利用者のいる支援センターでは、感情ワークが一般の保育所よりも少なくなっている(28%)。

このことは、支援センターと保育所が異なる機能と役割を持ち、そこで働く保育者の役割も異なることから、相互理解が深まることで、仕事内容や相互関係が整理され、「職務上の」明確なルールになっていくことによって、感情ワークが入り込む余地がなくなっているためと考えられる。

しかし、支援センターの場合には、開設から日の浅い施設では、管理職や同僚の保育士の理解や協力を希望する職員が多く、孤立感や感情的な負担も大きいことが推測される。そのため、管理職の積極的な相互理解を高めるマネジメントが重要と考えられる。

(5) 保育経営の問題

保育者の感情ワークは、かなり軽減されると考えられる。感情労働、感情ワークという観点から考えた場合、感情を意識し、対象化することによって保育全体の改善が図られると期待できるが、感情そのものを対象化するのではなく、管理職が目標や方法、勤務時間などについて明示し、それを共有し、徹底する保育所や幼稚園といった場が持っている状況を改善することで、必要以上に感情が入り込む余地がなくなり、本来の役割に専念できる可能性があることが示唆された。その点で保育経営は保育者の管理だけでなく、保育の室や内容、専門性ややりがいつながる重要な要素であり、その具体的方策を、事例から抽出しさらに吟味していくことが今後の課題である。

また、管理職の側に問題があるケースや保育者の側に問題があるケースもないわけではない。たとえば、保育者が未熟であったり、その行動が改善されないなどの理由から、同僚がその保育者にさまざまな指導を行う必

要があり、それが指導を受ける保育者の側が行う感情ワークにつながることもある。こうしたケースでは問題はむしろ保育者の側にあるといえ、教えたり、指導したりする側の感情ワークに焦点を当てて検討する必要がある。このことは、保護者に対する援助や指導において保育者が行う感情ワークとの共通性もあると考えられ、今後検討していく大きな課題である。

また、感情労働についての研究が広がる中で、「感情労働」「感情ワーク」「表層演技・深層演技」等の定義やタームについての再検討と、その学術的な意味理解の共有が図られる必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ① 高木勲・太田光洋感情労働としての保育V日
本保育学会第63回大会 2010年5月22日 松
山東雲大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 光洋 (OHTA MITSUHIRO)
和洋女子大学・人間・社会学系・教授
研究者番号：60248664

(2) 研究分担者

那須 信樹 (NASU NOBUKI)
中村学園大学短期大学部・幼児保育学科・
教授
研究者番号：60300456

(3) 連携研究者

()

研究者番号：